

ワーキングマザーが体験する「小1の壁」に関する質的研究

小野 智 佐 子

<目的>ワーキングマザーが体験する、就学前および就学後の「小1の壁」を明らかにすることである。<結果>小学生1～3年生までの子をもつ核家族世帯の共働き家庭であるワーキングマザーを対象にインタビュー調査を行った。共働き家庭にあるワーキングマザーは、就学前と就学後にそれぞれ異なる「小1の壁」体験をしていた。就学前には【就学後の生活がイメージ困難】、【納得のゆく放課後保育を探せない】、就学後には、【学童保育は保育園の延長線ではない戸惑い】、【わが子の放課後が心配】、【雇用形態の変更に迫られる】、【夏休みに入り新たな問題に遭遇】、【PTA活動に貢献できないジレンマ】、【サポートが得られないことによるストレス】であった。

keywords：小1の壁 質的研究 ワーキングマザー 学童保育 共働き家庭 核家族

目 次

- I. はじめに
- II. 研究方法
 - 1. 研究デザイン
 - 2. 研究対象
 - 3. 期間
 - 4. データ収集方法
 - 5. 分析方法
 - 6. 倫理的配慮
- III. 結果
 - 1. 研究対象者の各属性
 - 2. 分析結果
- IV. 考察
- V. 結語

I. はじめに

厚生労働省の国民生活基礎調査によると、平成26年度における児童のいる母の就労率は67.5%である。正規職員の割合も年々増加傾向にある（厚生労働省 2016:7-8）。共働き家庭にとって子育ては保育園を卒園すればひと段落というわけにはいかず、「小1の壁」とよばれる障壁が待っている。「小1の壁」とは、共働き家庭において子どもが保育園を卒園し、小学校に入学する際に直面する社会的な問題（坂木浩子 2015:37）を指す。小学校

に入学した途端に放課後の預け先がなく、仕事と子育ての両立が困難となり、これまで勤めてきた仕事を辞めざるを得ない状況となる。保育園では延長保育を利用することで、子育てと仕事の両立が可能であったが、学童保育は保育園に比べ早く閉所することが多く、仕事との両立に支障をきたすことになってしまう。また未就学児でなければ勤務時間短縮制度が利用できないなど、「小1の壁」は、職場環境も一因となっている（YOMIURI ONLINE 2016:28）。

平成27年度版少子化社会対策白書において「小1の壁」が重大課題として挙げられており、社会的にも注目されている。「文部科学省と厚生労働省が共同で、2014年に『放課後子ども総合プラン』を策定した。学校施設を徹底活用して、放課後児童クラブ及び放課後子供教室の一体型を中心とした取組を推進することとした（内閣府 2015:88-89）。」また、2019年度末までに、1万か所以上を一体型で実施することを目指している。一体型として運用することのメリットは、「小1の壁」を打破するとともに、次世代を担う人材を育成するため、全ての就学児童が放課後を安全・安心に過ごし、多様な体験・活動を行うことができることである（内閣府 2015:88-89）。

小1の壁に関する先行研究は、天野は「『小1の壁』

には、大きく分けて『質的な壁』と『量的な壁』の2つの壁がある。『質的な壁』は、保育時間の融通の無さが働く親の壁となり、保育不安をもたらしている。『量的な壁』は、学童保育に入所できずに待機する児童が多いことから、保育支援が手厚いものでない(天野 馨南子2016)。」と保育環境が働く親の壁になっていることを指摘している。「学童保育といった『第二の家庭』で幼少期を過ごす子供の割合が確実に増えてくることが見込まれる中、『第二の家庭』の質の向上と、親と子の絆を深めるための長時間労働抑制を主体としたワーク・ライフ・バランス政策の推進が、早急に望まれるところである(天野 2016)」と提言している。石渡は、小1の壁における「質的な壁」を検討し、「女性が望んだ働き方ができていないことは、働き方自体が制限されてしまう社会の仕組みになっている(石渡克朗 2015:17-18)。」ことを指摘している。このことは未就学児をもつ母親以上に就学児をもつ母親の働き方が制限されることを示している。以上の先行研究より、「小1の壁」は母親である女性側に子どもの保育の負担がいくことで、女性が望んだ働き方ができないことが明らかになっている。しかしワーキングマザーが就学前および就学後において、どのような「小1の壁」を体験しているかという研究はみられない。そこで本研究は、ワーキングマザーが体験する、就学前および就学後の「小1の壁」を明らかにすることを目的とする。共働き世帯数は1980年以降、年々増加しており(内閣府2006:45-46)、今後益々の増加が見込まれる。さらに核家族世帯であると世帯人員で育児を担うこととなるため、夫婦の負担が大きいことが予測される。本研究を通してワーキングマザーに対する「小1の壁」の支援の示唆を得ることができると考える。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究デザイン

2. 研究対象

対象は小学生1～3年生までの子をもつ核家族世帯の共働き家庭であるワーキングマザーである。

研究対象者のリクルートは機縁法を用いた。

3. 期間

2014年7月～9月

4. データ収集方法

対象女性に対し、半構造化面接法によりデータを得た。インタビューガイドを用い、就学前後における「小1の壁」に関する体験を語ってもらった。面接時間は40分程度であり、面接回数は1回であった。

5. 分析方法

面接法で得たデータは、M-GTA(木下康仁 2011:5-104)を用い質的帰納的に分析した。分析の最小単位を概念とし、分析ワークシートにて概念(木下康仁 2009:11-19)を生成した。次に就学前および就学後に焦点を当て、共通性を見出す中で抽象度をあげてカテゴリー化を行った。カテゴリーの生成は、常に生データとカテゴリーの確認をしあいながら行い、その後質的研究者にスーパーバイズを受けながら、修正を行いデータの信頼性・妥当性を確保した。またカテゴリーの関係性について検討し、ストーリーラインを作成した。

6. 倫理的配慮

研究目的と方法、内容を説明し、研究の参加は自由意思であること、また得た情報は研究目的以外には使用しないこと、データは鍵のかかる場所に保管すること等を対象者に伝え同意を得た。なお所属大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

Ⅲ. 結果

1. 研究対象者の各属性

6名の研究対象者の各属性(女性の年齢、夫の年齢、勤続年数、職種、時間外労働の有無、子どもの数、対象とする子どもの学年、学童保育等の利用の有無)を表1に示した。

表1 研究対象者の各属性

研究対象者	女性の年齢(歳)	夫の年齢(歳)	勤続年数(年)	職種	時間外労働	子どもの数(人)	対象とする子どもの学年	学童保育等利用
A氏	43	45	15	公務員	有	2	1年生	有
B氏	36	37	10.3	大学教員	有	1	2年生	有
C氏	36	39	9	看護師	有	2	2年生	無
D氏	42	43	15	事務職	有	2	3年生	有
E氏	49	53	26	会社員	無	2	3年生	有
F氏	43	48	16.5	介護士	有	2	3年生	有

2. 分析結果

1) 概念およびカテゴリーの生成
 分析ワークシートを用い20の概念が生成された。生成された概念の特徴を検討し、8のカテゴリーを生成した。カテゴリーと概念ならびに概念の定義を表2に示す。

表2 ワーキングマザー体験する「小1の壁」

カテゴリー	概念	概念の定義	
就学前	就学後の生活がイメージ困難	就学後の生活がイメージしにくいこと	就学後の生活がイメージしにくいことによって、漠然とした不安がある
		具体的な困難状況の情報不足	就学後の困難状況が具体的に知ることができずに情報不足である
		就学前準備状態を評価できない	就学前の準備はするが、必要な準備ができていないのか、自分では評価できない不安感がある
	満足のゆく放課後保育を探せない	我が家に合う放課後保育が見つからない	我が家に合う放課後保育を検討している過程において不安がある
		納得しないまま決断を迫られる	学童保育決定に十分に納得できないが、決断を迫られてしまう
		検討が不消化で後悔	放課後保育の検討が不消化であり後悔を抱く
学童保育は保育園の延長線上ではない戸惑い	保育園の延長線上ではない気づき	これまで学童保育は、保育園の延長線上だと思っていたが、保育園とは違うことに気がつく	
	成長に応じた学童保育の活用方法を検討	保育園とは違うため子どもの成長に応じて、学童保育の活用の仕方を検討する	
	わが子の放課後が心配	子どもに関わる時間と心の余裕のなさから、子どもの気持ちに寄り添えているか自問する	
就学後	雇用形態の変更に迫られる	子どもの不満と自分のニーズに挟まれる	子どもが抱く不満に応えきれないもどかしさを感じながら、自分の仕事ペースを崩せない葛藤がある
		家庭内がうまく回らない	家族員の生活がうまく機能せずに、家庭内が回らない
		仕事のやり方に悩む	子どもの負担や家庭内のことを考え仕事の仕方の変更に悩む
	夏休みに入ると新たな問題に遭遇	夏休みになっても気が抜けない	夏休みになり楽になるかと思っていたが、気が抜けず張りつめた状態が持続
		夏休みに入り生活パターンが変わり新たな問題発生	子どもは初めての長期の夏休みであるが、生活パターンが変わり屋敷の準備等いっそう負荷がかかる多忙感
		PTA活動、学校行事が盛りだくさんであることに驚愕	PTA活動、学校行事盛りだくさんに驚愕する状態
PTA活動に貢献できないジレンマ	フルタイムで仕事を持つ場合、できるPTA活動を模索する状態		
	PTA活動における肩身の狭さ	仕事を休めない等の理由から、授業参観がこの先も行けないのではないかと不安を感じる状態	
	授業参観等、永遠と行けない不安		
周囲のサポートが得られないことによるストレス	夫は学校のことは全てお任せ姿勢	共働きなので夫も協力してほしいのに、子どもの学校のことは妻に一任しており女性は不満な状態	
	乳幼児の時にようにサポートが得られないストレス	子どもが乳幼児から成長し学童になり、夫が保育園時代のように協力が得られないストレス	

2) ワーキングマザーが体験する「小1の壁」のカテゴリー
 共働き家庭にあるワーキングマザーが体験する「小1の壁」のカテゴリーは、就学前には【就学後の生活がイメージ困難】、【納得のゆく放課後保育を探せない】、就学後には、【学童保育は保育園の延長線上ではない戸惑い】、【わが子の放課後が心配】、【雇用形態の変更に迫られる】、【夏休みに入

り新たな問題に遭遇】、【PTA活動に貢献できないジレンマ】、【サポートが得られないことによるストレス】であった。

3) カテゴリーの特徴

以下に就学前および就学後体験する「小1の壁」に関する具体的内容を記述する。

カテゴリーを【 】, 概念を〈 〉、語りからの引用を「 」で示し説明する。

(1) 就学前体験する「小1の壁」

【就学後の生活がイメージ困難】「よく小学校に入ったら大変だよと言われるのですが、何がどう大変なのか情報が欲しかったです」との語りより、〈就学後の生活がイメージ困難〉により漠然とした不安を持っていた。さらに就学後の〈具体的な困難状況の情報不足〉もあり、問題意識をもてない状況であった。「防犯ベルの購入や通学路を歩いたりしたが、準備がこれでよいのか、わからなかった」との語りより、自分では、〈就学前準備状態を評価できない〉不安感をもつという体験をしていた。

【納得のゆく放課後保育を探せない】「学童保育の説明会に参加し複数のところを見に行っただが、隣駅だったり、値段が高い等、我が家に合う学童がなかなか見つからず焦った」との語りより、〈我が家に合う放課後保育が見つからない〉という検討過程においての焦りや不安感を抱いていた。そして「定員になるので早く決めたら、うちの子には合わなかった」との語りより、十分に〈納得しないまま決断を迫られる〉、さらに「勉強系や英語もやってくれるところもあるし、もっと見学して決めればよかった」との語りより、〈検討が不十分で後悔〉を抱く体験をしていた。

(2) 就学後体験する「小1の壁」

【学童保育は保育園の延長線ではない戸惑い】「学童は保育園のように一斉に保育するのかと思っていたが、違っており戸惑った」との語りより、予想と異なり学童保育は〈保育園の延長線上ではない気づき〉があった。学童保育は「保育園とは違って一人帰りもできるし、塾や習い事にもいけることを上手く活用したらよいと気づいた」との語りより、子どもの〈成長に応じた学童保育の活用方法を検討〉する体験をしていた。

【わが子の放課後が心配】「毎日忙しくバタバタしており気持ちの余裕のなさが、子どもに伝わるのでこれでいいのか自問している」との語りより、〈心の余裕のなさを自問〉し、自らの子育てを振り返っていた。我が子が放課後に「一人で留守番し、困っていないか直接にかかわれず大変心苦しい気持ちでした。」との語りより、ワーキングマザーとして〈放課後に直接に関われず自責の念〉を抱く体験をしていた。

【雇用形態の変更にも迫られる】「仕事よりも子どもの生活が優先となり、昇格、昇給をあきらめた」との語りより、キャリアアップもしたいが、我が子の生活を整えることが優先となり、〈子どもの不満と自分のニーズに挟まれる〉という葛藤をもつことになっていた。「子どもは朝になってこれやってと言ってくるし、家の中がごたごたしてしまい上手く回らなかったですね」との語りより、女性は子どもの突然の要求等によって〈家庭内がうまく回らない〉と認識していた。子どもの負担そして家庭内が上手く機能しないことで、〈仕事にやり方の変更にも悩む〉という体験をしていた。

【夏休みに入り新たな問題に遭遇】「子どもが夏休みになったら楽になると思っていたのに、楽にならず反対に気が抜けないですよ」との語りより、予想と違い〈夏休みになっても気が抜けない〉と張りつめた気持ちでいた。また「夏休みは学童のお弁当や習い事の準備、バスの時刻を指示し、やるのが余計に増えます」との語りより、夏休み前の生活と比較し、〈夏休みに入り生活パターンが変わる新たな問題が発生〉する体験をしていた。

【PTA活動に貢献できないジレンマ】「小学校に入ってみて、行事や参観、説明会等、こんなに学校に行くとは驚きました」との語りより、予想外に〈学校行事が盛り沢山であることに驚愕〉し、戸惑いを感じていた。また「学年委員が決まらないけれど、常勤だから引き受けられなくて肩身の狭さを感じます」との語りより、常勤でもできるPTA活動を模索しながらも〈PTA活動における肩身の狭さ〉を感じていた。そして「1年生だから授業参観にも行ってあげたいと思うが、休みが取れない日と重なってしまい、なんか永遠

に行けないのかなと不安です」との語りより、この先も〈授業参観等、永遠に行けない不安〉を抱く体験をしていた。

【サポートが得られないことによるストレス】「主人は小学校の事は全て私に任せて何もしなです」との語りより、共働きのため夫も協力して欲しいのに、〈夫は学校のことは全てお任せ姿勢〉であり不満を持っていた。また「保育園の時は小さかったから、子どもに何かあると職場の人も協力してくれたけど、小学校に入ったら頼みにくいですね。小さいお子さんいる人優先って感じですよ」との語りより、子どもが成長し学童となったことで、〈乳幼児の時にようにサポートが得られないことによるストレス〉を感じ、自己のコントロールを超えた壁を体験していた。

IV. 考察

1. ワーキングマザーが体験する就学前の「小1の壁」

就学前の「小1の壁」には、【就学後の生活がイメージ困難】という壁があった。このことは、「何がどう大変なのか情報が欲しかったです」とあるように、情報不足から子どもが就学後の生活がイメージできないため、危機意識がもてずに不安となってしまうと考える。特に第1子の場合には経験則がない。情報不足による漠然とした不安になると考える。そのため定期的に必要な情報提供をすることによって、就学後のイメージがもて目標が設定でき就学前準備につながると考える。新道らは、「定期的に悩むことは、脅威が予測されたとき、先の事を悩むことができる。先だって適度に悩んでおけば、その状況を準備したことになる。定期的に悩むことは、後の重荷を減少させてくれるばかりではなく、予めその人の自我を強めてくれる。すなわち脅威が出現したとき問題を処理する自信を強めてくれる（新道・和田 1997:34）」と述べているように、定期的に情報提供することは事前に検討するきっかけづくりになると考える。さらに「準備がこれでよいかわからない」とあり、目標が不確実であることが確信につながりにくいと考え。就学前に放課後保育を探すが、【納得のゆく放課後保育を探せない】という壁にぶち

当たっていた。我が家に合う放課後保育を模索するが、納得できないまま決断に迫られてしまい、検討が不十分なままとなり後悔の念に至ると考える。十分時間をかけて複数の放課後保育施設を検討し、メリット、デメリットを比較した上で納得のゆく結論を出すプロセスが必要である。

2. ワーキングマザーが体験する就学後の「小1の壁」

就学後の「小1の壁」には、学童保育は【学童保育は保育園の延長線ではない戸惑い】という壁があった。しかし、「塾や習い事にもいけることを上手く活用したらよい」という気づきからも、子どもの成長に応じた学童保育の活用方法を模索し、家庭に合う放課後保育の活用を見出すことにつながっていた。そして、【わが子の放課後が心配】という体験をしていた。「子どもが困っていないか、直接に関われず大変心苦しい」とあるように、母親として放課後に直接に関わることができずに自責の念を抱き、さらに心の余裕がなく子どもの気持ちに添えているか自問していた。このことは、母親が働くことによってわが子に負担をかけていないか揺れ動く気持ちの表れであると考え。そして、母親として、【雇用形態の変更に迫られる】という体験をしていた。仕事と子どもの生活をやりくりするが、家庭内がうまく機能せずに、雇用形態の変更に迫られることになっていた。「昇格、昇給をあきらめた」と仕事の目標を下げ、子どもの生活を守るための調整に向かっていった。ワーキングマザーである女性は、自分の仕事への要求とわが子に十分に关れないもどかしさが、アンビバレントな気持ちになってしまうことが伺える。

更に、【子どもが夏休みに入り新たな問題に遭遇】という体験があった。夏休みは、女性は通常通りの就労生活をしながら、子どもだけが長期休暇という特殊な状況になる。そのため、女性と子どもの生活パターンを再構築する必要が生じる。「女性は自分の生活だけでなく、家族の生活にもかわりを持ち責任を負っているが、伝統的な日本社会では女性にその役割が期待されている。(山田昌弘2001: 11-19)」とあるように、子育てを担う母親に負担がかかっていることが伺える。さらに女性は子どもとの関係だけでなく、【PTA活

動に貢献できないジレンマ】を経験し、学校社会や周囲の人々との間でストレスを感じていた。このことは、PTA活動に貢献したくともできないジレンマが、ワーキングマザーに肩身の狭い思いとなっていくと推測する。以上より、共働き家庭のワーキングマザーは、就学前から就学後にそれぞれ異なる「小1の壁」を体験していた。

未就学児の場合は保育園に通い、ワーキングマザーは、安心して働くことができていた。保育園には親の働く権利と家族の生活を護ることを支援する役割があった。ところがわが子が就学し、ワーキングマザーがうまく適応できないと働き方に制限が加わるようになっていく。このことはワーキングマザーが「小1の壁」によって、不安定な状況に置かれてしまう。子育てを担うのは母親の役割といった考えが未だに強いことがワーキングマザーの負担感を高めており、それを解決する重要な鍵が父親の子育て参加であるといえる。

3. 「小1の壁」を支援する提言

1) 就学前における予期的に情報提供する

就学前の保育施設である保育園および幼稚園において、生活面および子どもの危機管理、放課後保育の検討など、就学前準備教育を体系化していく必要がある。そのことによって「小1の壁」の生活イメージが形成され、準備につながると考える。また、福祉保健センターで開催されている講演会や情報交換会等の資源がある。それらを紹介し女性が資源を活用できるよう支援する必要がある。

2) 男性側の意識改革

就学後の父親の子育て参加が少ないため、母親に保育の負担がかかり、女性が望んだ働き方ができないことになってしまう。子育て期の夫婦のワーク・ライフ・バランスの実現には、就学後においても父親が子育てに主体的に参加していく必要がある、そのためには男性側の意識改革が必要である。

V. 結語

小学生1～3年生までの子をもつ核家族世帯の共働き家庭であるワーキングマザーを対象にインタビュー調査を行った。共働き家庭にあるワーキングマザーは、就学前と就学後にそれぞれ異なる「小1の壁」体験をしていた。共働き家庭にあるワーキングマザーが体験する「小1の壁」の категорияは、就学前には【就学後の生活がイメージ困難】、【納得のゆく放課後保育を探せない】、就学後には、【学童保育は保育園の延長線ではない戸惑い】、【わが子の放課後が心配】、【雇用形態の変更に迫られる】、【夏休みに入り新たな問題に遭遇】、【PTA活動に貢献できないジレンマ】、【サポートが得られないことによるストレス】であった。

研究の限界と課題

今回、共働き家庭のワーキングマザーである女性の「小1の壁」の体験を明らかにした。しかし対象数6人とサンプル数が少ないため、一般化できない。リクルート方法が機縁法であったためサンプルバイアスがかかったこともあげられる。機縁法は、人的ネットワークに依拠しているため、生活環境が類似している対象者であったと考える。小1の壁は、地域の環境、祖父母の協力、放課後保育にかける経済性、子どもの性質などによっても中身はさまざまである。今後の課題として、サンプルバイアスがかからないような、リクルート方法を検討するとともに、サンプル数を増やすことが必要である。

文献

- 天野 馨南子(2015)「小1の壁」～その先のワーク・ライフ・バランス ニッセイ基礎研究, 2016年10月12日閲覧.
<http://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=38282&more=1?site=nli>
- 石渡 克朗(2015)「小1の壁」を越えろ, 明治大学卒業論文, 17-18.
- 岸 智子(2015) 女性のライフサイクルと就業に関する覚書. 南山経済研究. 南山経済研究 30(2), 105-115.
- 木下康仁著(2011) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践, 質的研究への誘い, 弘文堂, 東京, 35-104.
- 木下康仁(2009) 質的研究と記述の厚み, 弘文堂, 東京, 11-19.
- 厚生労働省(2015)厚生労働省の国民生活基礎調査7-8 (平成26年度), 2016年3月12日閲覧.<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa14/dl/16.pdf>
- 坂木浩子(2015)保育園を考える親の会, 「小1の壁」に勝つ, 実務教育出版, 37.
- 新道幸恵, 和田サヨ子(1997)母性の心理社会的側面と看護ケア, 医学書院, 34.
- 内閣府(2015)平成27年度版少子化社会対策白書, 内閣府, 88-89.
- 内閣府(2014)平成26年度版少子化社会白書, 内閣府, 45-46.
- 山田昌弘(2001)家族というリスク, 勁草書房, 東京, 11-19.
- YOMIURI ONLINE(2015)仕事との両立阻む「小1の壁」まとめ, 2016年10月12日閲覧.
<http://www.yomiuri.co.jp/matome/20150601-OYT8T50025.html>